

幼稚園および保育所における子どもと小動物とのかかわり — 教育・保育実習中の事例からの考察 —

Animal activities in kindergarten and nursery school : A case of childcare training for childminder course students

百 瀬 ユカリ

Yukari MOMOSE

Abstract

Learning about the value of life in early childhood has increasingly been regarded as important. It is thus necessary for students who wish to be nursery school teachers to witness the relationship between children and small animals in order to understand the importance of children learning the value of life. Therefore, we analyzed records of relationships between children and small animals in practical training at kindergartens and nursery schools. As a result, it became clear that the perception of value of the life for a child is related to the development of that child. It is important for the child to be aware of the value of life by ensuring that child-care workers who are involved with children of each age are conscious of child development and doing environmental composition.

Keywords : *animal activities, kindergarten, nursery school*

I. はじめに

近年の核家族化の進行により、家庭や社会の教育機能が低下してきている。また、子どもの社会体験・自然体験の不足や、社会全体のモラルの低下等、子どもを取り巻く環境にはさまざまな変化が生じている。さらに、児童生徒による命を軽視した事件¹⁾が発生し、大きな社会問題となっている。一方、甚大な自然災害²⁾によって、多数の命を奪われたことから社会全体が、改めて「命の尊さ」への気づき、「いのちを守ること」への取り組みや活動を進めている。

しかし、自殺者の数は減少しているとはいえ年間2万人を超えている³⁾。いじめ等を苦にしての若年者の自殺も増加傾向にある。こうした「命」を軽視した現象に対して、事件・事故の事後対応にとどまらず、もっと抜本的な次元での社会的な取り組みが求められていると思われる。

このような社会の現状から、人とのかかわり、自己への共感、思いやりの心を培うのが教育の重要な課題の一つである。正しい生命観、価値観を幼児期から児

童期にかけて築いていくことが大切である。こうした現状を踏まえ、本研究は、「命あるものから学ぶ」体験としての動物ふれあい活動の意義を再認識したいと考え継続している研究である。

筆者はこれまで、幼稚園及び保育所の園長や主任、実習を終えた学生への聞き取り調査を行ってきた¹⁾。それにより、幼児期における動物飼育活動を中心とした動物介在活動⁴⁾が「命の大切さや、共に生きることの大切さ」を伝えていくことの重要性がわかった。また、東京都内の「ふれあい動物園」の担当者への聞き取り調査等で、「動物ふれあい活動が命あるものとの直接体験として、幼児期の子どもに有意義である」ことを報告してきた²⁾。さらに、子どもの動物ふれあい活動に関する新聞報道の件数を約30年にわたって調査し、近年の社会的な動向として動物ふれあい活動が重視されてきていることを明らかにした³⁾。

幼稚園及び保育所での動物とのかかわりは、子どもにとって扱いやすい小動物を決まった場所で飼育する方法（動物飼育活動）だけではない。子どもが捕まえてきた虫（幼虫や、カタツムリ等も含む）を一定期間、飼育ケースなどに入れて飼うことも生き物とのかかわりといえる。その他、移動動物園など、専門の業者に

依頼して行事として動物とのふれあい活動を行う場合もある。さらに、遠足として動物園や牧場へ出向いて、ふれあい動物コーナーなどで動物とかがわることもある。

そこで、本報告では、保育者を目指す学生にも、小動物⁶⁾とのかかわりを通して生命の大切さを育むことへの意識を持つことは大切であるという観点から、幼稚園及び保育所実習での小動物とのかかわりの場面を記録し考察することにした。小動物と子どもとのかかわる事例を通して、幼児期に小動物とかがわる活動を積極的に取り入れていくための方向性を見出す一助としようとするものである。

II. 方 法

幼稚園・保育所の実習を終えた学生合計85人に、レポート形式での調査を2016年6月中旬～7月上旬に実施した。調査内容は、実習中に会った、幼児と小動物とのかかわりの場面について、出来るだけ詳しくその状況についての記録を自由記述し、直接提出するものとした。なお、レポートの内容については、研究対象に使用することがある旨説明した。

記述内容の条件として、幼稚園または保育所実習期間中に自分が配属されたクラスでの子どもと小動物がかがわる場面について、その様子をできるだけ具体的に記述することとした。場面としては、飼育動物でも、園庭で見つけた虫でも、園内での場面であれば飼育しているか否かは問わず事例対象とした。また、そこに登場する幼児の年齢は明らかにし、実名を挙げることなく記入することとした(エピソード記録)。提出内容については、集計、分析を行うことを伝達して行ない、必要に応じて学生に対し、追加の聞き取りを行った。

提出された事例の全ての記述内容に対して、年齢別に分類後、かがわりのあった小動物の種類を集計した。さらに、記述内容から小動物とのかかわり方の特徴を分析した。

III. 結 果

1. 事例調査の報告数について

幼稚園または保育所実習期間中に会った、子どもと小動物とのかかわりの場面についての事例報告の回収率は100%であった。しかし、実習中に小動物とのかかわりが見られなかったとして別の記録を記述してい

表1 年齢別事例対象の小動物

年齢	かかわった小動物
3歳	・ダンゴムシ(2事例) ・ウサギ(2事例)・アリ(2事例) ・オタマジャクシ, ザリガニ, カメ, キンギョ, カナヘビ, カエル(各1事例)
	計13事例
4歳	・ダンゴムシ(6事例) ・アリ(5事例), カエル(3事例) ・カブトムシ幼虫(2事例)・カメ(2事例) ・ウサギ, ザリガニ, クワガタムシ, トカゲ, 幼虫(各1事例)
	計23事例
5歳	・ウサギ(4事例), ニワトリ(3事例) ・カエル(3事例), カブトムシ幼虫(3事例) ・カマキリ, ハエ, ザリガニ, モルモット, カメ, トカゲ, カタツムリ, メダカ, ダンゴムシ, アリ, アオムシ他(各1事例)
	計28事例

た内容が10人おり、残り75人の事例について、幼児の年齢・対象になった小動物・場面のポイントを集約して分析を行った。

(1) 年齢別事例数

75事例の子どもの年齢の内訳は、以下のとおりである。2歳児-2事例, 3歳児-13事例, 4歳児-23事例, 5歳-28事例あった。また、異年齢のかがわる事例が6事例, 年齢が不明のものが5事例あった。

そこで、75事例から異年齢と年齢不明のものを除き、年齢別に事例の内容を集約し、対象になった小動物と場面の様子を明らかにした。

(2) 年齢別事例数とふれあいの対象となった小動物

表1のように、3歳児はダンゴムシ, ウサギ, アリが各2事例で、その他6種類の小動物が1事例ずつであった。4歳児は、ダンゴムシが6事例, アリが5事例, カブトムシ幼虫2事例, クワガタムシ1事例で、昆虫等が23事例中15事例を占めていた。5歳児は、ウサギ4事例, カエル, カブトムシ幼虫, ニワトリが各3事例の順に多く、子どものふれあう小動物の種類に違いが見られた。

2. 小動物別, 幼児とのかかわり方

今回集約した事例の内容より、昆虫, ほ乳類, その他の種類から選択することとし、事例数の多いアリ, ダンゴムシ, ウサギ, 事例の報告内容が具体的であっ

たザリガニを抽出して考察した。以下、小動物別に幼児のかかわり方の年齢による違いの特徴を明らかにしていく。

(1) アリとのかかわり方

表2のように、3歳児にとってアリは、小さくてたくさんいて動くものにすぎない。穴に土が入っていくことを楽しんでいるので、アリが生きもの（命があるもの）という認識は無い姿である。

4歳児は、黒くて小さな動くものに興味を持ち、その動きを一人から友達と一緒に見て楽しむようになる。中には、踏んで遊ぶ姿もあったが、「かわいい」と感じるようになっていく。また、好きなだけ観察をすると、元の場所に戻す姿が見られ、虫の気持ちを考えるようになっていく子どももいることがわかる。

5歳児は、アリがどこに居るか、普段の遊びのなかで場所を把握していることが誇らしく、保育者に伝えたいと思っている。また、「女王アリ」に注目していることも、多数存在するアリの中での特別な存在としての意識もあることがわかる。しかし、アリについては飼育の対象にすることはほとんど無い。

<アリと3歳児のかかわりの場面より>

砂場で遊んでいた3歳児のA児は、砂場の傍の花壇でアリの行列を発見した。すぐさまつまもうとしたがうまくとれないので、持っていたシャベルで叩き始める。アリは驚いたように散らばるが、次から次へと別のアリがやって来るので、A男は、どんどんシャベルでアリを叩いていた。

また、同じく3歳のB児は、別の場所でアリの巣穴を見つけた。決して大きくない穴に、土を入れて遊び始めた。アリが出てきたが、全く気にすることなく穴に土が入っていくことを楽しんでいた。

この報告を書いた学生によると、後日、同様の遊び

表2 アリの事例

年齢	子どもの様子
3歳	・アリ叩き ・アリの巣の穴埋め遊び
4歳	・一人で見ている ・友達と一緒に見ている ・踏んで遊ぶ ・「かわいいね」と言いながらつまもうとする ・虫籠に入れて楽しむ（見たらもとに戻す）
5歳	・居場所を知っていることを保育者に知らせる ・「女王アリ」探しをする（飼う対象ではない）

をしている際に、担任保育者が各々に声かけをしてやめさせていたとのことである。

<アリと4歳児のかかわりの場面より>

4歳児のC児は、天気の良い日には園庭に出て行き「たんけん」ごっこをしている。ある日、裏庭まで行って少し大きなアリを虫かごに数匹、苦労して集めて帰ってきた。しばらく保育室前のテラスでじっとアリの様子を見ていた。実習生にも「先生、ほら見て、すごいでしょ」と言って、実習生と一緒にアリを見ていた。じっくりアリを見て楽しんだのか、いつのまにかC児は裏庭に行き、虫かごに入れてきたアリを全部逃がしてきた。思わず実習生は「アリさん、きっと喜んでるね」と声をかけた。

<アリと5歳児のかかわりの場面より>

靴箱の傍の、すのこの隙間にアリの行列をみつけた5歳児のD児は、「こんなところにアリがいる」と、近くにいた友だちにもその場所を教えていた。すると、実習生にも「先生、もっとすごいこと知ってるよ。あのね、もっとアリがいっぱいいる場所あるんだ。巣がある場所知ってるよ」と伝えにきた。

関心を示した実習生を、D児は手を引いてその場所まで連れて行った。

(2) ウサギとのかかわり方

表3のように、ウサギとかかわる子どもの姿から、3歳児は心の拠り所として、ウサギとかかわっているように見える。また、4歳頃からウサギの気持ちを感じとっている子どもの姿である。5歳児になると、当番活動として飼育動物の世話に責任とやりがいを感じている姿が多く見られた。

<ウサギと3歳児のかかわりの場面より>

幼稚園の玄関にウサギのケージがあり、いつもき

表3 ウサギの事例

年齢	子どもの様子
3歳	・見ている（落ち着く場） ・普段あまり話をしない子どもが、決まって玄関のウサギの前でじっと見ている
4歳	・かわいいと感じ、餌を与えたいがる ・世話をしようとする
5歳	・暑そうにしている様子に気付き、「かわいそう」と言う ・自分たちが世話をするとウサギが喜ぶ ・ウサギは世話をしないと食べられない ・飼育当番にやりがいを感じている ・年長組だから飼育当番ができると感じている

まって3歳児のE児は登園して身支度を終わるとそこへ行っていた。実習生も少し慣れてきた3日目頃に、E児が朝、ウサギの前にいることに気づいた。話しかけても反応が無く、クラスでの一斉活動では保育室にいるE児だが、あまり自由遊びの時間に保育室にも園庭にも見かけなかった。保育室を中心に、子どもたちがどこでどのような遊びをしているのか目を向けると、毎日、玄関のウサギの様子をじっと見ているE児の姿があった。ウサギに話しかけているようでもあり、実際には話していなかったが心の中で聞かけているようでもあった。

<ウサギと4歳児・5歳児のかかわりの場面より>

F幼稚園では年長組がウサギの世話(飼育当番)をしている。ある日、4歳児のG児が、ウサギの当番をしてケージを洗ったり、餌の用意をしている年長組の傍にやってきた。しばらく様子を見ていたが、自分の手でウサギにえさをあげたいと言って、ウサギのケージ前にじっとしている。5歳児H児がニンジン(G児に「これ、食べさせていいよ」と差し出した。ウサギの顔に向かって、突き刺すようにニンジン差し込んだので、ウサギは怖がるようにケージの隅の方で小さくなってしまった。それでもG児はニンジンをウサギに近づけて押し込もうとするので、当番の年長児が集まってきた。H児が、「きつと、こわかったんだよ。こうやってあげてね」と、やって見せた。実習生も、「年長さんみたいにあげてね」と声をかけると、G児は、そっとウサギにニンジン差し出した。するとウサギはそのニンジンを食べ始めた。「食べたよ、食べたよ」と興奮気味のG児だった。

(3) ダンゴムシとのかかわり方

表4のように、ダンゴムシとかわる子どもの姿から、3歳児はただ動く小さなものとして見つけたら衝動的につぶすという行為を繰り返している様子が見てとれた。偶然に触れたことでダンゴムシが丸くなり、もっと探さずかけとなったこともあった。また、4歳児は、ついたり触り過ぎたりして、ダンゴムシが動かなくなっても、さらについたり触ったりと、扱い方が乱暴な場合が多い。5歳児になると、ダンゴムシにそっくりなワラジムシとの違いを指摘している姿が見られた。じっくり観察して、捕まえた場所に逃がしていた。また、ついたり丸くなるのを見ると、すぐにその場を立ち去るといった姿も見られた。これはむしろダンゴムシの性質を理解したようにも見える。

<ダンゴムシと3歳児のかかわりの場面より>

表4 ダンゴムシの事例

年齢	子どもの様子
3歳	・動くものとして見つけてつぶしている ・偶然、丸くなったのを見て、さらに探す
4歳	・つついて遊ぶ ・乱暴な扱いを続ける(死んでしまうが、理解していない) ・触りすぎて死なせる ・一人でつついて遊ぶ⇒友達と一緒につついて丸くして遊ぶ ・友達と遊ぶなかでダンゴムシのお家を作ろうとする
5歳	・ダンゴムシとワラジムシの違いを見ている⇒見たら逃がす ・少しだけつつくが、すぐにその場を去る(優しい扱い)

I幼稚園の園舎の裏側は、割と日陰が多く、ダンゴムシが沢山いる。ある日、偶然に砂場で遊んでいた3歳児が木陰にダンゴムシを発見し、すぐに踏みつけてしまった。別の3歳児は、衝動的に踏みつぶすことなく、しゃがんでつまもうとしていた。すると、急にダンゴムシが丸くなったので、驚いて見ていた。しばらくすると、またもとのダンゴムシに戻ったので、再度、追いかけるようにつまもうとしていた。ダンゴムシが丸くなったり動いたりするので、砂場で遊んでいたことを忘れて、すっかりダンゴムシ探しの時間となった。実習生は、ダンゴムシを踏んだ子どもに声をかける余裕がなかったと報告している。

(4) ザリガニとのかかわり方

表5のように、3歳児は興味は持つが、長い時間は興味が続かないようだ。4歳児は、ザリガニへの興味

表5 ザリガニの事例

年齢	子どもの様子
3歳	・その場では興味を示して見たり触ろうとしたりしている ・長期間は興味が続かない(飼育ケースで干からびていた)
4歳	・飼育ケースから出したり入れたり、乱暴な扱い ・脱走して居なくなったことに気付く ⇒「大丈夫、また釣るから」
5歳	・釣ったザリガニについて調べる ⇒食べ物は何か、どんな棲みかか 自分が飼うための情報を得ようとする

というより、捕まえる遊びの対象である。扱い方は雑で、たとえいなくなっても沢山いるからまた捕ってあげればいいと思っている。5歳児になると、釣ったザリガニを飼うためにどうしたらよいか調べる姿が報告された。

<ザリガニと3歳児のかかわりの場面より>

J 保育園の実習初日に入った3歳児クラスでのこと、保育室の片隅に飼育ケースが置いてあった。中を見ると、干からびたザリガニが2匹入っていたのだ。水も無く、これは、一日二日の状態ではなさそうだったとのこと。実習生は驚いて、子どもにどう言葉かけしたらいいのか、その言葉が見つからなかったという。そこで、実習後にこの件を保育者に聞いてみようとしたところ、保育者はその後、子どもに見えないところに片付けてしまった。

実習生にとってはショックで、飼育しているという意味や命を扱っていることへの配慮が感じられなかったと報告されている。

<ザリガニと4歳児のかかわりの場面より>

K 幼稚園では、園庭に小さな田んぼやビオトープがあり、そこにはザリガニが住んでいる。子どもたちはザリガニを釣るのが好きで、実習生が実習初日に保育室に入ると、すでに飼育ケースにはザリガニが沢山入っていた。子どもたちは、広告紙と紐で作った釣り竿でビオトープにいるザリガニを釣ったり、飼育ケースに入れたザリガニを素手で持つ等、とても関心があり、楽しんでいるようだった。しかし、実習生が気になったのはザリガニの扱い方であった。飼育ケースに戻す時は、置くというよりも上から落とすように戻していたのだ。実習生は、「ザリガニさん、上から落とすたら痛いと思うから、そっと置いてあげようね」と声をかけたが、あまり理解していないようだった。次の日の自由活動で、ふと飼育ケースを覗くと、一匹のザリガニの片腕が抜けていた。実習生は「どうしてこのザリガニのはさみ無いのかな」と近くで遊んでいた子どもに聞いてみたが、「見たら取れていた」と答えるだけだった。

また、別の日には、飼育ケースのザリガニの数が減っていたので「ザリガニ、どこかへ行っちゃったのかな。探してこようか」と子どもに声をかけたところ、「大丈夫、また釣ってくるから」と何のためらいもなく返ってきた。

この事例に立ち合った実習生は、二週間の実習期間中にザリガニに触れている子どもを多く見たが、子

どもたちにとってザリガニは「動く面白いもの」という認識で、「ひとつの命」として捉えられていないように感じた。実習生は、その様子が悲しく思え、改めて保育者は“命の重みや尊さ”を子どもの発達を考えながら伝えていく必要があると実感したとのことである。

IV. 考 察

1. アリ、ダンゴムシとのかかわり方からの年齢別の特徴

3歳児にとってアリ、ダンゴムシは、小さくてたくさんいて動くものにすぎない。アリの巣穴に土が入っていくことを楽しんでいる、見つけたら衝動的につぶすといった残酷な行為を繰り返しているので、アリ、ダンゴムシが生きもの（命があるもの）という認識は無いといえよう。

4歳児は、黒くて小さな動くものに興味を持ち、その動きを一人でじっくり見ているといった姿から、友達とも一緒に見て楽しむようになる。徐々に「かわいい」と感じるようになっており、気持を友達と共感し合うこともあり、人とのかかわりができている。また、好きなだけダンゴムシを観察すると、元の場所に戻す姿が見られ、虫の気持ちを考えることができるようになっていく子どももいることがわかる。しかし一方で、ついたり触り過ぎたりして、ダンゴムシが動かなくなっても、さらについたり触ったりと、扱い方が乱暴な場合が多い。踏んで遊ぶといった残酷な姿も見られたことから、4歳になれば一様に、命があるものとして認識できるとはいえない。死んでしまうことへの理解が無いのでこのようなかかわり方をしていると考えられる。

5歳児は、アリがどこに居るか、普段の遊びのなかで場所を把握していることが誇らしく、保育者に伝えたいと思っている。また、「女王アリ」に注目していることも、多数存在するアリの中での特別な存在としての意識もあることがわかる。しかしアリについては飼育の対象にすることはほとんど無い。ダンゴムシについては、よく似たワラジムシとの違いを見ている姿が見られた。じっくり見ると、捕まえた場所に逃がしていた。また、つついて丸くなるのを見ると、すぐにその場を立ち去るといった姿も見られた。これは、対象を生きているものとして捉えているかかわり方といえよう。ダンゴムシを捕まえた場所に逃がしたり、捕っ

てきて自分の意のままにせず自然のままにしておくといった優しい扱いをしている。

2. ウサギとのかかわり方からの年齢別の特徴

3歳児の6月頃は、まだ園での生活に慣れず家庭とは違って不安定な気持ちになったり、自分の居場所が見つからない場合が多い。その場合の心の拠り所として、ウサギとかかわっているように思われる。

また、4歳頃からウサギの気持ちを感じとって、世話をしようしたり、話しかけたりするようになるようだ。5歳児になると、当番活動として飼育動物の世話をしているが、「自分たちが世話をしないとウサギが死んでしまう」ことを理解しているので、責任とやりがいを感じている姿が多く見られたと考えられる。

3. ザリガニとのかかわり方からの年齢別の特徴

3歳児は、ザリガニに興味は持つが、長い時間は興味が続かないようである。それが、生きることや、「死」については理解していないので、ザリガニが飼育ケースのなかで干からびていても無関心でいられるのだろう。

4歳児のかかわりの事例は、ザリガニは、捕まえる遊びの対象である。一匹くらいいなくなっても、沢山いるからまた捕ってくればいいと思っている。その程度の存在なので、当然扱い方は雑であると考えられる。

5歳児になると、釣ったザリガニを飼うためにどうしたらよいか調べる姿が報告されていた。「飼う」ということを意識していることから、適切な飼い方をしないとザリガニがどうなるのかを理解しているようでもある。生きている対象を飼うことは、世話をしないと死んでしまうことが経験としてわかっていると思われる。

以上のように、幼児とそれぞれの小動物とのかかわりの事例から、「生きもの」としてかかわっていることが明確な場面、「死」を意識している場面、「死」を認識していない（理解していない）場面としての姿を見出せた。このような姿を、梅田（2013）は、生きものとのかかわり方の発達段階のモデルを作成している。生き物とのかかわり方の発達段階を、「A 生き物に興味がない段階」「B 生き物に興味を持つ段階」「C 自分本位なかかわり方で、生き物とかかわる段階」「D 生き物の気持ちになって、生き物にかかわる段階」の4段階を設定した⁷⁾。それぞれの事例から、年齢が上がるほど段階が上がり、同じ段階でも場面によってはよ

り時間をかけて問題解決をするために思考することで、生き物とのかかわり方は発達していくことがわかった。

V. おわりに

限られた期間の事例ではあるが、幼児が小動物とかかわる姿から、最初は「動くモノ」としてかかわり、乱暴にすると動かなくなることで、世話をしないと死んでしまうこと（生きていること）が分かるようになる段階があることがわかった。それは、年齢によって一様に理解度がはっきり区別されるとはいえないが、その姿から、発達過程と関連した命の存在の有無の認識が明らかになった。

こうしたことを保育者が意識して各年齢の子どもとかかわることや環境構成を行うことが、子どもが小動物を命があるもの〈生きもの〉としてかかわり、命の大切さへの気付きに繋がると思われる。保育者自身が小動物とのふれあいを通して、子どもの年齢に応じた心情を育み、適切な環境構成を行うことも大切である。

幼児期において生命の尊さを学ぶことの大切さは、近年ますます重要視されてきている。平成30年に施行される新幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領には、小学校教育との接続を視野に入れたうえで、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」として、「自然との関わり・生命尊重」が項目として挙げられ、「自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探求心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚悟をもって関わるようになる」と記されている⁸⁾。

今回の調査は、実習生による実習期間に限られた様々な場所での調査であるため、対象児の数・対象年齢及び小動物の数や捉え方に違いがある。今後は、担任保育者の専門的な視点で、年間を通じた事例を質的に分析し、小動物とのふれあいから命の大切さを育む活動として取り入れるための、具体的な活動方法や内容について明らかにしていきたい。

付記

本稿は、平成28年11月日本乳幼児教育学会第26回大会（於：神戸女子大学）において口頭発表を行った内容に加筆・修正したものである。

注

- (1) 1997年神戸市の少年Aによる連続児童殺傷事件、2014年佐世保市の小6女児殺害事件、2015年川崎市中1男子生徒殺害事件など、児童生徒による凄惨な事件が起きている。
- (2) 1995年阪神・淡路大震災、2011年東日本大震災や原子力発電所の事故等の災害や事故。
- (3) 厚生労働省は、警察庁の自殺統計に基づく2016年の自殺者数が2万1764人と発表した（2017年1月20日）。前年より2261人（9.4%）少なく、減少率は過去最大。7年連続の減少で、22年ぶりに2万2000人を下回った。
- (4) 「動物介在活動」について
動物を介在する諸活動を表す言葉の総称として「動物介在諸活動」の用語が用いられている。動物介在諸活動は主に、①介護・福祉活動を目的とした動物介在活動（Animal Assisted Activity：AAA）、②動物を用いての治療支援活動である動物介在療法（Animal Assisted Therapy：AAT）、そして③動物を教材として用いる動物介在教育（Animal Assisted Education：AAE）の3つが存在し⁵⁾、動物とのふれあいや相互作用から生まれる様々な効果が医療や福祉、教育の現場で活用されている。本研究での動物介在活動は、保育現場で実践されている3種類の動物介在活動に限定して用いることとする。その内容は、①動物飼育活動（主に小動物の飼育の他、子どもが園庭で捕ってきた虫などを飼育ケースで短期間飼う場合も含める）、②園に外部から動物を短時間連れてくる移動動物園形式の動物ふれあい活動、③園外へ出向いて動物とふれあう活動（動物園や牧場等への遠足で、そこにいる動物とふれあう活動）とする。
- (5) 「小動物」について
本論では、日本獣医師会小動物臨床部会動物介在活動推進検討委員会（2009）に述べられている学校飼育動物に、虫やザリガニなどを加えて「小動物」と呼ぶこととする。なお、「学校飼育動物とは、小学校・幼稚園等の教育施設において飼育される哺乳類、鳥類、爬虫類、両生類、魚類等の動物であって、子どもの教育に役立つ動物」とされている⁶⁾。

引用文献

- 1) 百瀬ユカリ（2015）幼稚園及び保育所における動物介在活動の意義－動物飼育活動を中心に－、大東文化大学紀要第53号＜社会科学＞71-79
- 2) 百瀬ユカリ（2015）動物園における幼児の動物ふれあい活動に関する考察、大東文化大学教育学研究紀要 第6

号 49-63

- 3) 百瀬ユカリ（2016）幼稚園及び保育所における動物飼育活動の意義－実習生の体験から－、大東文化大学紀要第54号＜社会科学＞47-57
- 4) 百瀬ユカリ（2016）新聞記事に見る“子どもの動物ふれあい活動”、日本子ども社会学会第23回大会発表要旨集録78-79
- 5) 日本獣医師会小動物臨床部会動物介在活動推進検討委員会（2009）動物介在諸活動（動物介在活動・動物介在療法・動物介在教育）と獣医師及び獣医師会の役割、社団法人日本獣医師会 1-6
- 6) 日本獣医師会小動物臨床部会動物介在活動推進検討委員会（2009）動物介在諸活動（動物介在活動・動物介在療法・動物介在教育）と獣医師及び獣医師会の役割、社団法人日本獣医師会 7
- 7) 梅田裕介（2013）幼児教育及び生活科で育む生命尊重の態度の研究－昆虫飼育に焦点を当てて－、生活科・総合的学習研究 第11号 149-158
- 8) 全国保育士会編（2017）平成30年度改正施行～平成29年3月31日告示～保育所保育指針 幼保連携型認定こども園教育・保育要領 幼稚園教育要領、12 53 103-104、全国社会福祉協議会、東京

参考文献

- ・藤岡久美子（2013）「子どもの発達と動物の関わり－動物介在教育の展望－」山形大学大学院教育実践研究科年報（4）4-11
- ・梶田毅一（2006）、「いのち」を大切にできる心－実感的理解を深める」、『児童心理』、60(10)、2-10
- ・片山由美他（2009）「幼稚園教育における5領域の総合的な指導への一考察－動物の世話をとおして－」花園大学社会福祉学部研究紀要 第17号 13-21
- ・三木澄代（2012）、「幼児期における生命観育成と保育－発達に即した乳幼児期からの＜いのち＞の教育についての検討－」、『環太平洋大学研究紀要』、(6)、47-53
- ・並木美砂子（2008）、「子どもが動物に出会うとき、風間書房
- ・柴内裕子（2009）「特集等 特集 子どもと動物－上手にふれあうためには」『小児科臨床』第62巻4号（通号735）2009.4 日本小児医事出版社、581-590
- ・谷田創・木場有紀（2014）、「保育者と教師のための動物介在教育入門、岩波書店

（平成29年9月13日受付）
（平成29年12月13日受理）

